

日本甲状腺学会雑誌 12 巻 1 号に掲載された特集 1 「甲状腺癌の過剰診断を考える」
についての日本甲状腺学会の立場について

2021 年 4 月付にて、日本甲状腺学会の公式の雑誌である日本甲状腺学会雑誌において、特集記事の一つとして「甲状腺癌の過剰診断を考える」が掲載されました。近年、甲状腺癌の過剰診断に関する諸問題が世界的に取り上げられていることから本特集は企画されました。しかしながら、本特集での記載内容の全てが、日本甲状腺学会としての総意を示すものではありません。学術雑誌は本来、自由な学術的な議論を行う場であるからです。すなわち、ここで述べられていることは、意見の一部にすぎないということです。

日本の甲状腺の専門家は、世界的に問題となる以前からこの課題に取り組んできました。2012 年に発行された「甲状腺超音波診断ガイドブック」では、検診において微小乳頭癌の発見に努めることは好ましくないとし、超音波所見から乳頭癌が疑われる症例に対しても、穿刺吸引細胞診を行う腫瘍径に下限を設けました。また、日本甲状腺学会では「成人の低リスク甲状腺微小乳頭癌 (cT1aN0M0) の取扱いについてのポジション・ペーパー (一般医家に向けて)」の日本語版および英語版を公表しています。ここでは、検診等で偶然発見、診断されたきわめて予後良好と考えられる乳頭癌に対して、過剰な治療を避ける目的で経過観察をするという日本から発信された新しい診療方針について精査し、その妥当性を評価しています。腫瘍があるということを知った上で慎重に経過を観察するという方策は、「アクティブ・サーベイランス (積極的経過観察)」として現在、世界中の専門医から支持されています。ここで重要なことは、リスクの低い腫瘍は放置してよいということではありません。病状が進行して将来命を脅かすものが存在するからです。

福島県でこれまで実施されてきた県民健康調査「甲状腺検査」についても、本特集では一部で批判の対象となっていますが、本検査は日本甲状腺学会の臨床重要課題の一つとしても取り上げ、むしろ震災後一貫して支援を行ってきました。

以上のように、日本甲状腺学会雑誌に掲載された記事ではありますが、本特集で述べられたことすべてが、必ずしも日本甲状腺学会としての統一見解ではないということをここに表明いたします。